

蒙古襲来前後の朝廷の様子や、持明院・大覚寺両統迭立など、重要な事件を目撃した実務官人の克明な記録を自筆本により翻刻

勘 仲 記 第六

史料纂集古記録編 第200回配本

高橋秀樹・櫻井彦・遠藤珠紀 校訂

自筆本を底本とする最善の本文を提供！
断簡や逸文、日記本文が現存しない部分の日記目録も収録。
底本の体裁をつとめて尊重した翻刻！

2019年5月30日刊行 ISBN978-4-8406-5200-1 C3321 ¥13000E

A5判・上製・函入・304頁 定価（本体13,000円＋税）

【収録年月】弘安11年（1288）1月～9月

【第六の見どころ】

● 伏見天皇の即位式

兼仲は弁官として参仕したこともあり、即位日時^の勘申（2月19日条）、礼服御覽（2月20日条）、即位式に供奉する官人の除目（3月6日条）、太政官庁の装束（3月8日条）など、即位式（3月15日条）の準備段階から詳細な記事が残されている。

● 即位に伴う改元

4月28日には改元定が行われ、中国・北魏の正史である『後魏書』から取られた「正応」に決定するまでのプロセスが記されている。

● 兼仲の周辺

息子である光資が元服し（正月17日条）、宮廻に参仕（2月6日条）、さらに秀才に補任される（2月23日条）記事や、家領である山辺荘に関する訴訟記事（8月12日条ほか）なども注目される。

◆^{かんちゅうき}勘仲記とは 藤原（広橋）兼仲（1244～1308）の日記。日記名は勘解由小路中納言兼仲の称に由来する。別名『兼仲卿記』。国立歴史民俗博物館に自筆本87巻が所蔵されているほか、若干の断簡や逸文が伝わっている。日野流の広橋家は文筆の家として朝廷に仕え、兼仲の父経光の『民経記』など、代々日記を残した。

本記は將軍惟康親王の京都送還と久明親王の將軍宣下・関東下向など鎌倉幕府と朝廷との関係、持明院・大覚寺両統迭立、鎌倉後期の公家訴訟制度の実態と整備、摂関家の家政、畿内寺社や在地の動向、詩文・神楽、仏教説話的な言説等々、政治・経済・宗教・文化・芸能、さらに宮廷儀式と多方面にわたる13世紀後半の一級史料である。

とりわけ二度の蒙古襲来とその前後の京都の状況を知る重要な記事を多く含み、朝廷・寺社がこの事態にいかに対処したかを看取できる。

八木書店

〒101-0052 東京都千代田区神田小川町3-8

Tel:03-3291-2961 / fax:03-3291-6300 pub@books-yagi.co.jp <https://catalogue.books-yagi.co.jp/>